

## 千刈狸の呟き

この春ようやく重い腰を上げて、電子カルテを導入した。丁度各種感染症が次々と流行しているタイミングだったため、スタッフに支えられ、患者さんの協力のもとフル操業状態に対応した。電子カルテは絶対無理、という自分自身でがっちりと作り上げた壁は間もなく消え去り、昨日よりも一歩前進を目指して夢中で過ごす日々だった。

何か大きなミスや事件があった訳ではなかった。仕事を終え帰宅すると消耗しきっていて、今までやれた事が出来ずに先延ばしにしたり、何か理由をつけて断ったりし始めた。はっきりとした異変に気付いたのは、家の植物達が元気をなくし枯れ始めたり、数十年毎日書き続けてきた日記に空白が目立ってきた事だった。

相当なストレスでも、酷く落ち込んだり、愚痴ったりする自分ではなかったが、今回は相当参っていたらしい。そんな時、過去の自分に問いかけてみた。過去の自分あつての現在の自分だから。「こんな事じゃ、情けないよね？」心の中でメッセージを送ってみた。本当は「助けて！」と言いたかったのかもしれない。

返信は、まるでブーメランのように、間もなく戻ってきた。数十年前の幼馴染から電話があった。地元紙の「読者をつくる昭和100年新聞」に当時の私達の写真が載る事になったから、見ておいてと遠方に住む彼女からのお願いだった。当日の新聞には、数えきれないほどの小さな写真が並んでいて結局見つけられず、彼女に新聞を送った。

数日後、彼女から手紙が届いた。新聞からコピーして引き延ばした当時の私達の写真も同封されていた。彼女は写真を見たら、

### ～ 過去からのブーメラン ～

#### 月影の狸

あの頃の広い空や空気のおい、皆の笑い声などがリアルに感じられて、如何に豊かな日々だったか思い出し、感謝したという。

そして、二人でよく遊んだ「先生ごっこ」の事。交代で先生になり、地面が黒板で、その辺の枝や石ころや葉っぱを使った授業。詳細は覚えていない。彼女はその後、幼稚園の先生になり、一緒に遊んだ友達は、小児科の先生になったと、担任をしていた年長児達に言ったら、「すごいね！」と目を輝かせていたという。

私はもう退職したけれど、私の分まで大好きな子供達のために、先生を続けて下さいと結んであった。同封の白黒写真の私達は、満面の笑顔で、その中の私は、「大丈夫だよ、その調子！」と大きく頷いているように見えた。

過去からのブーメランは、即座に私に大きなエネルギーをもたらしてくれた。そして、私に戻ってきたブーメランは、間もなく私が誰かのために放つ瞬間を待っている。